

全国141の病院ネットワーク

(2019年7月1日現在)

※赤字は本号に掲載している病院です(今後NHO PRESSで各病院を紹介してまいります)



NHO PRESS

National Hospital Organization

vol.11
2019
Summer

特集 退院後の生活まで見据えた患者支援



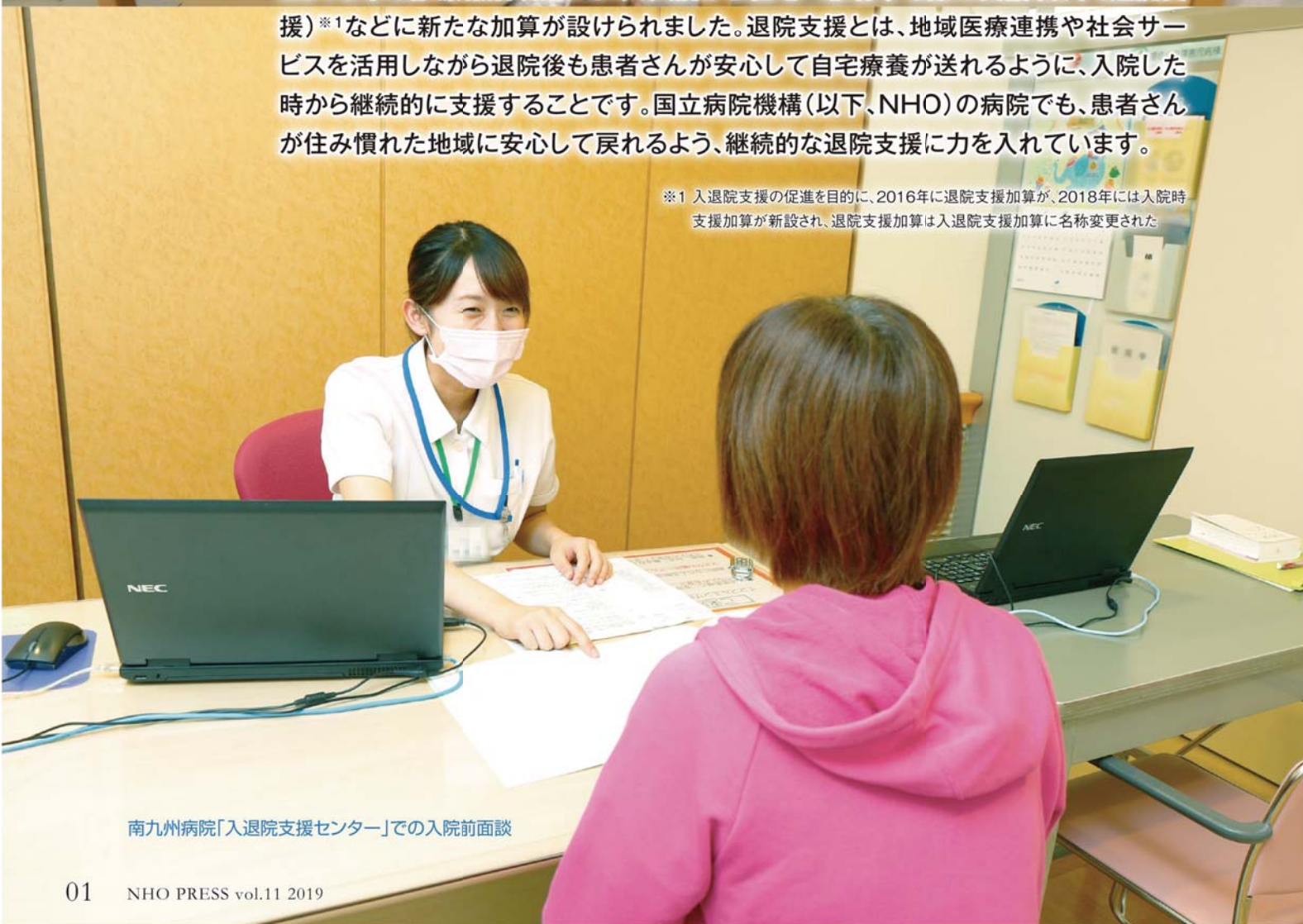


特集
feature

退院後の生活まで見据えた患者支援 ～退院支援看護師が主導する退院支援～

2016年の診療報酬改定により、入院から在宅へ移行する際の支援（以下、退院支援）※1などに新たな加算が設けられました。退院支援とは、地域医療連携や社会サービスを活用しながら退院後も患者さんが安心して自宅療養が送れるように、入院した時から継続的に支援することです。国立病院機構（以下、NHO）の病院でも、患者さんが住み慣れた地域に安心して戻れるよう、継続的な退院支援に力を入れています。

※1 入退院支援の促進を目的に、2016年に退院支援加算が、2018年には入院時支援加算が新設され、退院支援加算は入退院支援加算に名称変更された



南九州病院「入退院支援センター」での入院前面談

確実な支援に繋げる 退院支援看護師

大阪医療センター（大阪市）で退院支援看護師を統括する増田雅子看護師長は、「できるだけ以前と同じような生活ができるように支援することが、退院支援だと思っています」と話します。治療や看護はもちろん、退院後に患者さんが望む生活を実現させる支援が求められています。

退院支援の対象となるのは、緊急入院した方、退院後も自宅で治療や介護が必要な方、あるいは経済的理由により退院後の生活に不安がある方などで、ご家族もその対象です。

退院支援では退院に向けて現実的な支援に繋がるよう、患者さんやご家族に関するあらゆる情報を早い段階から把握する必要があります。また、入院中の治療やケアを的確に把握する必要があるため、医師や看護師をはじめ、患者さんと関わった多職種から情報を集める必要があります。あるいは、退院後に地域医療機関の受診や社会サービスの利用など地域医療連携が欠かせないことも多いので、地域医療連携室との連携も必要です。こうした継続的な支援をとりまとめるのが、退院支援看護師（P06参照）です。



「入院中や退院後の生活に不安があれば、遠慮なく私たちに声をかけてほしい」と話す増田看護師長。自らの入院経験から患者さんの気持ちを推し量り、「自分に置き換えて患者さんの気持ちを考えなさい」と後輩を指導しているという

専従であることを生かした 大阪医療センターの支援

大阪医療センターは幅広い領域の疾患に対し総合的な医療を提供している急性期病院です。現在、地域医療連携室の一員でもある退院支援看護師7名は、専従看護師として、退院調整部門を統括する師長・副師長（退院調整看護師）と共に活躍しています。

大阪医療センターの場合、院内には入院センターがあり、すべての入院患者さんはここで入院手続きを行います。その際、経済的なことも含めて生活状況を確認（問診）し、退院に向けて支援が必

退院支援部門カンファレンスで退院支援看護師たちにアドバイスする増田師長。増田師長は、地域医療連携室の医療ソーシャルワーカーなどとも頻りに情報交換している





大阪医療センターの退院支援部門カンファレンス

要な患者さんかどうかを判断します。福祉制度を活用し、経済的・心理的な面も含めて生活の支援が必要だと判断された時は、早い段階から地域医療連携室の医療ソーシャルワーカー(MSW)とも連携を図りながら、主に2つの方法で情報を集めていきます。

一つは、退院支援看護師自らが、患者さんが入院している病棟で情報を集める方法です。部門全体を統括する師長・副師長を除く7名の退院支援看護師には、それぞれに担当する病棟があります。退院支援看護師は毎日、担当する病棟に散って病棟カンファレンスに参加したり、必要に応じて患者さ



在宅調整のため、担当のケアマネジャーと電話で話す齊前裕一郎看護師。大阪医療センターで働く約1割の男性看護師の一人

んと面談したりして、入院中の治療経過や患者さんの気持ちを確認しています。

もう一つはチーム医療を生かした方法です。患者さんと他のスタッフとの何気ない会話に、患者さんの本心や問題点が隠れていることもあります。そこで情報を多職種で共有できるように、電子カルテを用いてリハビリスタッフや薬剤師、管理栄養士などがキャッチした情報を病院全体で共有するのです。

南九州病院での支援の具体例

慢性期の患者さんが多い南九州病院(鹿児島県始良市)では、退院支援を強化するため、2018年4月に新たに入退院支援センターが設けられました。入退院支援センターは地域医療連携室と連携しながら、入院から退院までの支援を担っています。やはり退院支援を主導するのは4名の退院支援看護師ですが、大阪医療センターのように専従ではなく外来や地域医療連携室に所属する看護師で、病棟の担当はありません。その代わりに、各病棟には退院支援を補助する退院調整リンクナース※2が配置されており、リンクナースと連携して患者さ

んの情報を集め、支援に繋げています。

南九州病院でも電子カルテで情報が管理されていますが、特徴的な工夫の一つに「介入用紙」があります。この用紙には、入院が決定した瞬間から退院支援看護師が各スタッフと何を確認すべきかなどが、細かな項目として時系列で記されています。各項目を記入・チェックすることで漏れのない退院支援を実現しているのです。当然これは基本的な流れなので、他のスタッフと連携しながら、患者さんに応じた情報のキャッチと支援に努めています。

※2 退院支援を担当する病棟の看護師。師長の推薦や本人の希望により病棟の看護業務と兼務する



首藤真奈美副看護部長(左)は、「センターが稼働してようやく1年。まだまだ改善して充実させたいです」と今後の抱負を語ってくれた。辻智子看護部長(右)は急性期病院での長い勤務経験があり、南九州病院では2年目。「慢性期の病院は初めてで、患者さんとスタッフとの温かい関係に感動しました」と笑顔で話してくれた(南九州病院にて)



南九州病院の「入退院支援センター」

退院前合同カンファレンスと退院前後訪問

大阪医療センターでも南九州病院でも、退院が迫ってくると退院前合同カンファレンスが行われます。参加者は、担当医、退院支援看護師や病棟看護師、医療ソーシャルワーカーなどのほか、患者さんが退院後に過ごす地域からは、退院後の治療や看護を担ってくれる在宅医や訪問看護師、介護が必要な場合はケアプランの作成や介護事業者との調整を行うケアマネジャーなどが参加します。退院後の治療・介護と生活をどのように具体化するか、患者さんやご家族を交えて確認し合える大切な機会です。

必要に応じて患者さんの自宅を訪問することもあります。退院前訪問・退院後訪問と呼ばれるもので、退院支援看護師と病棟看護師を基本に、必要に応じて医療ソーシャルワーカーや在宅医が同行し、生活環境に問題がないかを具体的にチェックし

ます。患者さんやご家族からの伝聞だけではなく、自らの目で自宅の状況や環境を確認するのです。病棟で患者さんを担当した看護師も同行するので、患者さんやご家族の安心にも繋がります。



退院前合同カンファレンス。まず、担当医から経緯の説明があり、今後も継続していく医療や介護について、退院後の患者さんの生活に問題が起こらないよう調整する(大阪医療センターにて)

病院の特性に合わせた支援

大阪医療センターの増田看護師長は、退院支援看護の第一人者といわれている宇都宮宏子さんの「退院支援は看護そのもの」という言葉を大切にしています。退院後の生活まで見据えた看護が、看護師の役割だと考えているのです。また、退院支援によって地域に帰ってもらい、何かあればすぐに対応できる体制を提供することが急性期病院の役割だと教えてくれました。

一方、南九州病院の首藤副看護部長は、「慢性期中心の病院なので、退院後に通院している患者さんを院内で見かけることも多く、地域に密着した息の長い支援であることが当院の特徴です」と話してくれました。南九州病院には神経・筋難病や緩和ケアの病棟もあるので、社会サービスを最大限に



大阪医療センターで退院支援に使用されているマニュアルや案内パンフ

生かした支援(P09-10参照)や、人生の最期をどこで迎えるべきかという問題とも正面から向き合った支援が必要です。

こうした退院支援看護師を中心とした支援が、NHOの病院では日々行われています。

スペシャリストの素顔

現場で活躍するさまざまな職種をご紹介します。

退院支援看護師

入院前から退院後の生活まで、患者さんやご家族が安心して過ごせるよう、看護業務の一部として経済的・心理的・社会的に支援する専門の看護師。特定の資格ではなく、退院支援の専門性に応じた研修を修了した看護師が担う。

南九州病院(鹿児島県始良市)

退院支援看護師(地域医療連携室看護師) 中村 貴子さん



退院支援看護師とは？

退院支援看護師は、当院のように地域医療連携室や入退院支援センターそれぞれに所属して配置されていることもあれば、大阪医療センターの退院支援部門のように専従として配置されることもあります。どのような形であれ、患者さんにとって退院後の生活が安心して過ごせるものとなるよう、看護を通じて支援することが役割であることに変わりありません。

南九州病院の看護師養成プログラムには、他の専門職との調整の仕方や、地域のネットワークや社会サービスの活用の仕方などが組み込まれており、一定期間、病棟などでの看護経験を持ち、かつNHOの専門的な退院支援研修を終えた看護師が退院支援看護師となります。



地域医療連携室で患者さんの情報を共有する中村看護師

求められる能力は？

退院支援看護師には入院から在宅へと繋げる、さまざまな能力が必要です。その中で第一にあげられるのはコミュニケーション力でしょう。患者さんやそのご家族が気軽に相談できるよう、話しやすい環境づくりが大切です。また、私たちの努力や頑張りだけで理想の支援が実現するわけでもなく、医師や看護師をはじめ、他の専門職との連携が欠かせません。特に医療ソーシャルワーカーとは、福祉制度や社会サービスを有効に活用できるよう、きめ細やかな情報交換が必要です。役割分担を適切に行えるマネジメント力も求められます。

入院期間の中で退院に向けた準備や調整を行うためには、入院中の患者さんと接する時間が最も長い、病棟看護師との連携も重要です。病棟でも早い段階から退院を見据えた準備ができるように、病棟看護師に退院支援の大切さを伝えていくことも、私たちの重要な役割です。

患者さんとの面談の様子。「退院後も気になるので、患者さんが通院の診察に来られた際には、お話しするようにしています」と話す中村看護師



大阪医療センター(大阪市)

許可病床数694床



近畿地方のNHOを代表する拠点の一つ。三大疾患(がん・心臓病・脳卒中)をはじめとする、広い領域の疾患を扱う高度総合医療施設。AIDS(エイズ)やC型肝炎などの感染症、高度救急救命医療、災害医療の拠点でもある。



大阪医療センターの東隣に広がる難波宮跡公園。飛鳥時代と奈良時代の一時期に宮殿が置かれ、その跡地が広大な公園として緑地化されている。

南九州病院(鹿児島県始良市)

許可病床数475床



重症心身障がい児(者)医療や神経・筋難病などの慢性期疾患を対象とする治療と療養に長い実績を持つ。地域のニーズに応じて急性期や亜急性の疾患にも対応し、特に呼吸器領域では県内を代表する集学的医療を提供している。



南九州病院の緩和ケア病棟庭先からの眺め。南九州病院は鹿児島湾に面しており、湾を挟んで県民の誇りである桜島が一望できる。



No.08

金沢医療センター

Interview
越田 潔/院長

院内オーケストラ

音楽の力で人々の心がつながる

2017年4月30日、国内有数の高い音響特性を持つ石川県立音楽堂のコンサートホールは、1,200名を超える聴衆のスタンディングオベーションに包まれていました。金沢医療センター（石川県金沢市）のロビーで、たった3名の医師が始めたコンサートは、13年の時を経て61名も出演するオーケストラとして大きく花開きました。

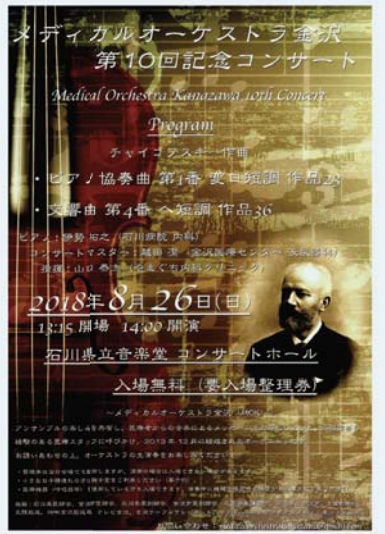
「楽譜を見失うほどの緊張でした」と懐かしそうに振り返る越田院長が、院内のロビーで伊勢拓之医師（現石川病院院長）と瀧口哲也医師（耳鼻咽喉科部長）とともに初めて演奏したのは、2004年6月のことでした。「とりあえず1回」というつもりで開催した院内コンサートは予想外の反響があり、「私も出演できますか?」という職員からの問い合わせが舞い込んだといいます。『入院生活に潤いの場を提供する』というコンセプトのもと企画された院内コンサートは、多くの医療関係者を引き寄せ、回を重ねるごとにメンバーが増えていきました。2014年2月にグランド



毎回130名あまりの聴衆を集める、講堂での院内コンサートの様子。最前列の聴衆は演奏者とわずか1mあまりの距離で、本格的なオーケストラを体感できる



石川県立音楽堂で2度目の演奏をするメディカルオーケストラ金沢のメンバー（2018年8月26日に開催された「第10回記念コンサート」の様子）
*当日の様子はインターネットで動画配信中（「メディカルオーケストラ金沢」で検索）



「第10回記念コンサート」の告知ポスター。ポスターはメンバーによる手作り、チケットの作成や当日のマネジメントなどもメンバーが担当した

ピアノが新調されたのを機に、30名の医師から成る記念コンサートが院内で開催され、“オーケストラ”へと飛躍しました（後日、メディカルオーケストラ金沢と命名）。そして、継続的な活動が評価され、石川県立音楽堂という憧れの舞台に立つ機会を得たのです。

院内コンサートはこれまでに90回開催され、出演メンバーは150名以上にのぼります。長い活動の中で、メンバーは院内の医師や看護師・薬剤師・臨床検査技師などとどまらず、近隣病院の医師や地域の開業医、あるいは医学生や市の職員まで広がり、音楽を通じてつながる貴重なネットワークにもなっています。

越田院長と瀧口部長は、「普段とは違った私たちの一面を見てもらえる機会があるということは、実はとても大切なことではないでしょうか」と評します。医療関係者の生き生きとした姿は、患者さんやご家族に元気と安心を与えていることでしょう。また、練習で顔を合わ

すと自然に地域医療の話になり、金沢医療センターの医師と開業医、市の職員などが集まって“地域連携”が生まれているといます。「次に考えていることがないわけではありません」と笑顔で話す越田院長の姿から、さらなる進化が期待できそうです。



金沢大学の臨床教授でもある瀧口耳鼻咽喉科部長は「医学部学生は皆さん楽器が上手で、授業では私が指導していますが、演奏となると立場が逆転しているような…」というエピソードを楽しそうに話してくれた。指導者と学生との特別なつながりが生まれることも、予想していなかった効果だという



チェロを演奏する越田院長



金沢医療センター (石川県金沢市)

許可病床数554床。地域医療支援病院・地域がん診療連携拠点病院・災害拠点病院・臨床研修指定病院などの指定を受けた高度総合医療施設。すぐ隣には日本三名園の一つである兼六園があり、歴史ある恵まれた環境に立地している。



セーフティネット医療

※結核、重症心身障がい、筋ジストロフィーを含む神経・筋難病など他の医療機関では体制の整備、経験、または不採算とされることからアプローチが困難な分野の医療

病棟で仕事をする東海林晶(とうかいりんあきら)さん。東海林さんの職歴は3年以上で、パソコンと接続したモニターを使って、データ入力などの仕事をこなしている



福祉サービスの活用はもちろん プラスαで幅広い支援を

～仙台西多賀病院の神経・筋難病患者への支援～

相談支援事業所と 一体化した支援

筋ジストロフィーを含む神経・筋難病の患者さんにとって、退院は大きな不安を伴うこともある一方、大きなチャレンジにもなります。病院で長期療養している患者さんが多く、病院の外での生活は困難に直面することがあるからです。

東北地方の神経・筋難病治療の拠点である仙台西多賀病院は、こうした患者さんの社会参加や復帰を支援しています。医療福祉相談室には、障害のある患者さんへの支援を専門に行う仙台市から指定を受けた相談支援事業所が併設されており、患者さんの希望が実現するよう、福祉制度を活用した支援を行っています。

生活を支援するための さまざまな取り組み

まず重要なのは生活支援です。相沢祐一医療社会事業専門職は、自らの身を守る手段として身体障害者手帳や障害年金制度の活用について、丁寧な説明を心掛けています。手帳は障害者雇用と直結し、既に働いている場合、新たに働きたい場合でも経済的自立の基礎となるからです。また、年金は障害の程度によって金額が異なりますが、有益な所得保障となります。

入所中の患者さんへは、病院にしながら働ける情報入力などの仕事を提供している会社の担当者をお招きして、企業説明会を実施しています。実際、こうした説明会を通して、仕事をし



◀「仕事をするということは、社会とつながっているという証です。少しでも多くの方が彼らを理解し、社会に参加できる機会を提供してくれることを願っています」と相沢専門職(右)

同席してくれた鈴木茉莉相談支援専門員(左)も「健常者にとって当たり前なのが、彼らにとってはとてもハードルが高いのです。夢が少しでも叶うよう、これからも支援の在り方を考えていきたいです」と抱負を語ってくれた



◀患者さんが仕事としてデザインした証書やイベントチラシ。仙台西多賀ENJOY LIFE STATIONでは、デザイン業務などを患者さんにも発注している。左は仙台西多賀ENJOY LIFE STATION企画の「女子プロレス観戦ツアー」の告知チラシ



▲日当たりに恵まれている院内のバルコニー。取材当日は家族と一緒にシャボン玉を楽しむ患者さんの光景に恵まれた

ている入所中の患者さんがいます。また、神経・筋難病と診断された社会人の患者さんへは、今後どのように雇用先に伝えていくのかを具体的にお話します。社会の一員として働くことが、精神的な支えとなるからです。

夢を実現させるための 新しいチャレンジへの支援

幼いころから入所している患者さんの中には、一人暮らしに挑戦したいという人もいます。しかし、難病の患者さんを受け入れてくれる物件は皆無に近いのが実情です。相沢専門職は福祉事業を展開している大学時代の後輩に働きかけて、障害者向けバリアフリー住宅の建設を実現させました。

東日本大震災を機に、仙台西多賀病院に受診歴がある患者さんによるネットワークづくりがはじまり、その支援も行いました。「仙台西多賀 ENJOY LIFE STATION」(2013年設立)と命名されたネットワークは

Facebookを利用(非公開)したもので、患者さん自身が中心となって企画・運営を行い、助成金の申請やボランティアの募集など、側面から立ち上げを支えました。今では会員数34名を数え(2019年5月末現在)、音楽祭や野球・サッカー観戦ツアーを実施する際に、ヘルパーの手配や交通手段の確保を行うなどの支援を続けています。

仙台西多賀病院では主役はあくまで患者さんであるという考えのもと、いつでも相談・支援できる体制を整えているのです。

仙台西多賀病院(宮城県仙台市) 許可病床数 480床



筋ジストロフィーを含む神経・筋難病、重症心身障害児(者)、骨・運動器疾患などを中心に、地域のニーズに根差した質の高い医療を提供。全国初の筋ジストロフィー患者の長期療養を実現するなど、障害者への支援に力を入れている。



広域の子どもたちに 多様な診療科で対応

四国こどもとおとなの医療センターの小児医療



NICUで電話対応する久保井医師。四国こどもとおとなの医療センターはNICUをはじめ、PICU(小児集中治療室)やMFICU(母体・胎児集中治療室)なども備えている

NICU(新生児集中治療室)の様子

香川県や地域の医療機関とも連携

子どもが病気にかかったとき、診察や治療が急がれるのは、子どもは大人に比べて免疫力が弱いからです。「子どもには余力がありません。特に新生児は悪い状態になるのが早いので、先手を打つようにオーバートリートメントしていきます」と説明するのは、四国こどもとおとなの医療センター(香川県善通寺市)で新生児内科医長を務める久保井徹医師です。

同センターは小児の専門病院を前身とするため、小児循環器や小児神経の内科、小児心臓血管や小児脳神経の外科など、内科系・外科系ともに細分化された多くの小児診療科を備えていることが特徴です。

「当院は24時間365日、3次救急まで対応しています」と特長を挙げるのは、小児科で小児感染症内科医長を務める岡田隆文医師です。「事故に遭った患児などに対応できる設備、体制も整え、香川県はもちろん、愛媛県東部、徳島県西部からさまざまな患児を受け入れ、治療後は地域の医療機関に返す形をとっています」と久保井医師は話します。

小児医療で重要になるのは、地域の医療機関との連携です。香川県は育児支援に積極的で、



久保井医師(右)と渡辺旭代看護師(左)。NICUで働く渡辺看護師は、「ネット情報などが溢れる中で迷うことも多いと思います。ちょっとでも困ったことがあれば、相談してください」と話す

通常“一県に一つ”とされる総合周産期母子医療センター(ハイリスクの妊産婦や胎児・新生児に対応)を県内に2施設も有しています。一つは四国こどもとおとなの医療センター内に、もう一つは香川大学医学部附属病院にあり、互いに協力して病床を有効活用しています。

病気以外の相談にも寄り、子育てを支援

子どもの急な発熱(P14参照)への対応も多い四国こどもとおとなの医療センターの救急外来では、医師や看護師が気づいたことを記す「気になるシート」を活用しています。こうした情報を院内の育児支援対策室に繋げ、さらに地域と保健・福祉の各機関と連携をとり、児童虐待の防止なども含めた子育て支援を行っています。

岡田医師は、「当院は親御さんが心配なときに頼れる病院です。“小児科医は子どもが病気になったとき診る人”というイメージがあるかもしれませんが、例えば“うちの子は多動じゃないか”など、病気以外のことでも何か不安があれば、気軽に相談してください。その科では答えられなくても、当院には多くのスペシャリストがおり、誰に尋ねればいいのかをお伝えできると思います」と語りかけます。



小児病棟で入院中の子どもの様子を確認する岡田医師(左)と藤本縁副看護師長(右)。「幼い子供たちにとって治療やケアが、できるだけマイナスの記憶として残らないよう心がけています」と藤本副看護師長

新しいアートが生まれる病院



昨年(2018年)から今年にかけて、リハビリセンター廊下に新しく描かれた2幅の点描画。四国こどもとおとなの医療センターは新築の設計段階からアートを取り入れた病院として知られ、建築後も新しいアートが次々に生まれている。

四国こどもとおとなの医療センター(香川県善通寺市)



許可病床数689床。成育医療(小児領域)と成人医療を二本柱に、高度な専門医療を提供すると同時に、ホスピタルアートを取り入れ、癒しの環境づくりを推進。地域ボランティアの協力を得て、さまざまな活動を展開している。

病院の管理栄養士と調理師がいっしょに考えた

体が喜ぶレシピ

栄養豊富な落花生をお好みの食材と一緒に

家庭でも簡単に作れる健康メニューを、ご紹介するこのコーナー。今回は長崎医療センター(長崎県大村市)の春田典子栄養管理室長が紹介する、長崎県大村地方で愛されている郷土料理「煮ごみ」です。

大村特産の落花生(ピーナツ)入り煮物

煮ごみ

【食材】1人分

こんにゃく/れんこん/ ごぼう/厚揚げ……各 20g	砂糖/濃口しょうゆ/ 薄口しょうゆ/料理酒……各 3g
にんじん…………… 15g	みりん…………… 1.5g
干し椎茸…………… 2g	だし昆布…………… 1g
落花生(殻付き)…… 20g	

※落花生は茹でピーナツでも可

- ① 落花生は下茹でして、殻をむいておく。
- ② 具材は1.5~2cm大にカットする。
- ③ だし汁に調味料を加えて、②の具材を煮る。
- ④ 具材が柔らかくなったら、①を加えて完成。



写真は病院の「郷土料理の行事食(七夕)」として提供されたメニュー

ポイント

ピーナツ以外の具材はさまざま、大村地方では家庭の味として代々引き継がれています。ピーナツの大きさに合わせて具材が小さめにカットしてあることも特徴です。ピーナツはピーナツ豆腐や塩茹で(通称:ゆでピー)としてもよく食されており、大村市民に愛され続けている食材の一つです。



長崎医療センター
公認マスコット
「ヘリドッグ太」くん

栄養管理室のみなさんより



長崎県の中央に位置している大村市は、海と山に囲まれた自然豊かな郷土です。長崎医療センター近くの大村公園は、城郭(玖島城)とソメイヨシノの桜並木(1,500本)とのコントラストが見事で、「日本さくら名所100選」にも選ばれています。長崎空港からも近いので、ぜひお花見に“来てみんなー”。

産後のお母さんに労う気持ちを込めて提供されている“お祝い膳”。和え物や煮物といった副食に、ステーキを加えて豪華に仕上がっている。



長崎医療センター(長崎県大村市)

許可病床数643床。
11の専門政策医療に基づいた高度総合医療施設。ドクターヘリを有し、高度医療を担っている。栄養管理室では、四季折々を味わってもらうため、季節感のある行事食や産後のお祝い膳の提供にも取り組んでいる。

こんな食材が自慢です!

さまざまな人や文化が上陸した長崎。和・華(中国)・蘭(オランダなど西洋)との交流の中で、長崎独自の食が育まれてきました。例えば「卓袱(しっぽく)料理」はその代表格で、女将の「お膳をどうぞ」という言葉から始まります。お膳とは鯛の吸い物のことで、「お客様に鯛1尾を使いました」というおもてなしの意味が込められています。中国料理の膳に和食・洋食をアレンジして、円卓を囲んで和気あいあいといただくスタイルです。あるいは、中国人留学生向けに安く栄養価の高いメニューとして考案されたのが、みなさんご存じのちゃんぽんや皿うどんです。

もしもに備えて

子どもの急な発熱

今回は「地域医療」(P11-12)の掲載内容とも関わる、「子どもの急な発熱」について、四国こどもとおとなの医療センター(香川県善通寺市)の岡田隆文医師(小児感染症内科医長)に伺いました。



岡田医師が最近始めた運動不足解消法はマラソン。病院から近い丸亀市在住で、高石垣で有名な丸亀城を見ながら走れる香川丸亀国際ハーフマラソン 2020 への出場を目指してトレーニング中



1 子どもの急な発熱の原因は?

主な原因はウイルス感染症です。咳や鼻みずを伴う呼吸器系の感染症や、お腹を下したりする消化器系の感染症が多く、救急外来で診察する患者さんのほとんどが感染症です。

2 夜間救急を利用する際の目安は?

夜間の急な発熱に対して、救急を利用すべきかの判断基準は一概にいえるものではありません。ただ、一つの目安となるのは赤ちゃんの月齢です。特に生後3カ月未満の赤ちゃんの急な発熱は、救急利用の1割程度が髄膜炎や尿路感染症など、かなり心配な感染症だったという報告があるので、救急を利用してください。月齢以外では、まず熱が38度以上であるかどうか、あるいは呼びかけても反応が薄い、長時間水分が摂れない、体にけいれんが見られる、手足に赤色や紫

色の網目状模様が出ている(網状チアノーゼ)、といった状況を目安にしてください。

3 受診までにできることや予防策は?

先にお話したようなことが該当しない時は、体を冷やしたり水分をこまめに摂ることが大切です。ただ、子どもは熱があっても動き回ることが多いので、無理に冷やすというよりは、冷却シートを使ったりして子どもが気持ちよく感じる状態にしてあげましょう。そして翌日、早めに医療機関を受診してください。

予防策としては、年齢に応じて手洗いを習慣化させてあげてください。また、原因となるウイルスはご家族が外から持ち込んでしまっていることが多いので、家族みんなでうがいや手洗いを徹底することが大切です。

より良い紙面づくりのために、アンケートにご協力を!

※ご回答はメール(国立病院機構本部広報文書課宛)にてご送信ください。

※メールの本文に質問の番号(問1、問2など)と選択肢の番号または回答文を直接ご記載ください。

問1. 性別・年齢、および今号をご覧になった方法を教えてください。

性別: 1. 男 2. 女 年齢: () 歳

方法: 1. () 病院で 2. 機構ホームページで

問2. 読みやすく、わかりやすい広報誌だと思われましたか?

1. 読みやすい 2. 読みにくい 3. どちらでもない

理由 ()

問3. 興味をもたれた内容とその理由をお答えください。

内容 ()

理由 ()

問4. 今後、取り上げてほしい内容、テーマがありましたら教えてください。

()



上記 QRコードから送信先メールアドレスを読み取れます。



送信先 メール: 700-info@mail.hosp.go.jp